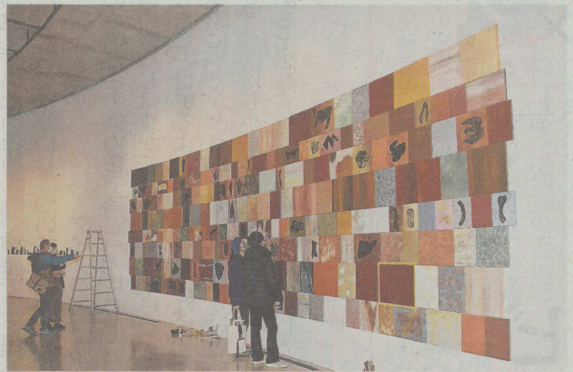


青森の要素 作品に ACCAIR成果展



野原さんの作品が並ぶ展示室

青森の要素を取り込んだ作品やダンスに来場者が見入っていた。

野原さんは下北や津軽の海辺で石を集め、石の色や模様を手がかりに、市民と協働でパネルにアクリルで下地を描いた。その上に野原さんが、影の重なりなど自然の風景の中から取りだ

した不思議な形を重ねて描き、約220枚のパネルを組み合わせた縦3段、横9段ほどの作品を制作中。野原さんは取材に「ストリートに分かるものが多い中、分からないまま描くのは絵でしかできないこと。今分からなくても覚えていても作れる作品になれば」と話した。10日ごろまで公開制作し、展示は20日まで。阪中さんは「かゆみ」を

テーマにした映像インスタレーションを発表。アトピーや乾燥肌の市民に、VR（仮想現実）グローブをはめてかゆいところを引っ掻いてもらい、手の動きを記録。画面上で、白いチューブ状の線の重なりで表現した。阪中さんはトークで掻けば掻くほどずい形になる。掻くこともクリエイティブなことだと考えられた」と話した。展示は6日まで。

青森市の青森公立大学国際芸術センター青森（ACC）で、アーティスト・イン・レジデンス（AIR）プログラムの成果展が開かれている。個展を開いているのは野原万里絵さん（大阪）、阪中隆文さん（群馬）、

サラ・ウアドウさん（フランス）。11月21日には振付家・ダンサーの神村恵さん（東京）のワークショップ（進行中）公演や、ゲスト審査員の芸術評論家



鈴木正治の作品を体で表現する神村さん

モロッコの先住民・ベルベルの家系に生まれたウアドウさんは、青森のこぎん刺しや縄文の模様と、ベルベルの織物や古代の土器の模様に類似性を見いだし、比較・対照して解釈を試みた。思索の道程を示すマインドマップや、手漉ぎの紙にドローイングし、和

とじした作品などを展示している。20日まで。神村さんは県内の炭焼き小屋や浜小屋、青森市出身の彫刻家・故鈴木正治のアトリエ小屋などをまぎまぎ「小屋」をリサーチし、ダンス作品を制作。ワークショップは12日午後3時半から。20日まで記録映像を展示する。入場無料。問い合わせはACCA（電話017・764・5200）へ。（大友麻紗子）